

イベリア半島の 旅を省みて



秋田直躬

あれから一年たつ。私は昨夏、高校の短期研修という応援をいただいて四十五日の旅を経験することができた。パリに一週間いた他は、もっぱらスペインの中南部を徘徊し、ポルトガルにも寄り道した。

イベリアのほぼ中央に位置するマドリッドを基点として南下しながら内陸の乾燥高原地帯を東へ、中世を今に残す村々を訪ねながら地中海沿岸まで出てバレンシアを南下、アリカンテから西に内陸の山岳地帯に分け入り、ハエンから南下してグラナダへ。再び地中海に出てマラガ、ジブラルタルと最南の沿岸を西へ、大西洋の港町カディスからアンダルシアの平野を北上、セビリア、コルドバと立ち寄る。コルドバからシエラ・モレナ山脈を北西に突き切つて国境の町バタホスとつて返し国境沿いに南下、ポルトガルへは南端の海岸から入国。大西洋沿いに北上してリスボンへ。更に北上してから西に進路をとつてそのまま内陸部に分け入りマドリッドに戻るといふ、要約すれば、イベリア半島の南半分を東回りで一周したおおよそ五〇〇〇軒の旅であった。

一日に一枚は写生しようと思つて決め、四十

枚の画紙、パステル、ゲアッシュ、画板、画架、椅子といった写生用具を車に積みこんでくる日もくる日も走りづめた。限られた日程の中で、一つでも多く見ておきたい、描いておきたい、そんな背反する気持ちに責め立てられるようにして旅を続けた。H氏、Y氏、そして私の三人旅、いずれも私学の教壇で美術に携わる者同志である。

旅の目的は人生と同じで本当に決めにくい。欲張らぬ方が良いとわかっていても私の場合、やっぱり欲張りの何とやらで、未だに整理もついでない。とは言え、私には初めての海外旅行だったこともあって、出発の際や入国時の興奮、それに見聞きする全てに感心したり感動した覚えは今も昨日のこのように甦ってくる。岩倉の高校と自宅をピストンのように十数年も往復し続けている自分からの一時的な脱出、解放という意味では間違いない。意義あるものだった。しかし遠くの地まで行って慌しく駆け巡ることで、何を見、何を感じとれたのだろうか、ひょっとして何も見てこなかったのでは…？ 逆説的ながらそんな想いにも今かられてしまう。一ヶ所に留まり続けることで少しずつやっと見えてきたこ

とを確かめようと、そんな気持で鉛筆をにぎろうとしている今の私、そんな私を試す旅行でもあった。だが、その結論どころか、整理さえついていない。

今しがた成績出しに用いた電卓で旅行メモをめぐりめぐり計算してみると、一年前の今頃は、なんと一日平均百七十粒の移動を三十余日も続けていたことになる。殆どは一泊移動で、その間、三・四時間は写生していたから、車とはいえ時間的にも体力的にも移動はきついものだった。日によっては朝から夜まで五百粒以上も走りづめの時もあった。あの焼けついて乾き切ったフライパンのような大地を毎日、毎日、飽くことなくよくも駆け巡ったものだと想う。

原始絵画を訪ねて山岳の路ならぬ路に踏みこみ、タイヤを派手にバーストさせてしまったこともあった。重なる疲労か、食事毎のオリブ油に拒否反応を起こしたのか体調を崩し、丸一日、何も食わずふらふらになって地面に身を横たえながらイーゼルに向かったことも一度ならずあった。今から想えば、あまりにも日本的な呐喊精神を遠い異国で、はかrazuも発揮してしまった私だったが、それに

耐え得る、というより、それをはるかに上回る魅力がスペインにあったのも事実である。広大な国土のそここに尽きぬ魅力が積み重なり、点在し、広がって、まさしく、めぐるめくスペイン”であった。そのうえ、日本では体験できない夏。初めて実感できた地中海性気候のすがすがしさや、内陸部の乾燥地帯の強烈さ。緑の少ないむき出しの大地がうねりながら地平線となって彼方で夏空と溶けあ

ってゆく様は、偉大なる単純”といえいいのか。峨々たる山の頂きまでオリブやコルクの木が行進するのを見つづけたかと思うと、無数のひまわりの黄色と真青な空しか目に入らない平野を延々と走る。過ぎれば遠くの、あるいは近くの丘の頂きにそびえる城や教会、それらはいずれも十世紀以上もそのまま中世のイスラムやカトリックが、なかにはローマさえ生きて、夏と共にあった。

人っ子一人いない山や平原を数十粒車を走らせて、やっと次の村にたどり着くと、どこでも子供達の喚声が待ち受けていた。「チーノ、チーノ。」つまり「見かけないチャイナが車に乗って三人もやってきた」という訳か。車窓から首を出して「俺はチーノではない。

ハポネスだ。」と言ってみても彼らはお構いなし。考えてみれば、彼らの方が直観的に(視野的にも)間違っていないのだから仕方が無い。自分が東洋人であることを忘れてしまっているか、無理に忘れようとしているかにさえ思える変な日本人意識を思い知らされる出来事であった。シエラ・ネバダに近いペノドーラという小さな村で写生している時も小柄で実直そうな爺さんが傍に寄ってきて、あれこれ話してくれたが、その時も切り出しは、「お前はチーノか、コリアか、ハポネスか？」であった。

イーゼルを立てる日中は、まさしくカンカン照りで、出会うのは子供か老人が主だった。熱気ただようその時刻は大人達は家の中で眠っている(？)のである。都会でも田舎でもそれはほぼ同じであった。都市では一つの美術館を見るのに何度も足を運ばねばならなかった。日本では考えられないような時間に堂々と閉まっていたからである。チンチョンやクリプターナのような村でも昼間は、まるでゴーストタウンであった。カッと照りつけ、まぶしいばかりの陽光と青空の下、茶褐色の丘に真白な家が点々と連なり、その中か

ら石造りの城壁や教会の古びた塔が数百年の時を止めたかのようにニョキツ、と突き出て、それら全てが、しん…、と静まり返っている様は何と聞いていいか、うまくいえないが、人間の営みを越えた、時の流れの、あるいは自然の峻厳といったもので、これはスペインに居た間、ずっと痛く感じさせられるものであった。

日没は九時過ぎと遅く、昼間の熱気がとれる十時頃ともなると、どこでもブラスは人々が居たのか、老いも若きも子供達も小さな広場に鈴なりになって食事をし、ウィーノを飲み、大声でしゃべり合い、戯れあっている。それが夜中の一二時まで続くのである。そしてあくる日のゴーストタウン…。本当に彼らは何をしているんだろうと考えるのでしまう。小刻みなテンポで画的に忙しく立ち回らざるを得ない私たち日本の感覚からすれば不思議だ。彼らの悠長な生活ぶりや「アスタ・マニャーナ」の精神を「あしたまにあうわいな」と語呂訳して、それでは落ちこぼれてしまう日本を自嘲しいわけにはいかなかった。時に耐え、自然のきびしさに耐えて共

に一体となって生きる、そんな生き方を選んでいる（強いられてる）人々に、より人間的なものを感じた。ウモの山中で肩を並べてパンをかじった無口なロペス爺さん、アンダルシアの片田舎ピラブランカで真昼間からウィーノを飲み大声で歌っていた底抜けに陽気な男達、写生をのぞきに来て、桑の実を手にと分けてくれたゲナーベの少女達、などなど、彼ら彼女らは今も変わらないだろう。人間の豊かさとは何だろう。少くとも私達日本人が獲得しつつある豊かさではなからう。私達が本当に勤勉なのか、の想いは、彼らはただ怠けてはいないのだという想いつながってゆく。そしてこの国からは美術の歴史を大きく塗り変えてしまうような偉大な画家が一人ならず生まれ出ているのだ。人間の個としてのとてつもないエネルギーや発想、画一とは正に反対のオリジナルな創造の力は、私達が今、失いつつあるものの中にあるのではないか。

マドリッドをはじめ各地の博物館や美術館で見た無数の、変幻極まりない文化遺産や、都市や村の至るところで見ることのできた歴史の遺産の数々。原始絵画、フェニキア、ギ

リシア、ローマ、西ゴート、アル・アンダルのイスラム世界、ロマネスクとゴシック、バロックのカトリック・スペイン、等々。それらは私がスペインに寄せていたイメージをぶちこわし、混乱させてしまうのに充分であったが、同時に不思議な魅力で私を益々とりこにしてしまうものでもあった。

この国の持つ魅力、荒々しさと繊細さ、陽気さと悲しさ、明と暗、錯綜と明快、華麗さと血生臭い泥臭さ、こうした両極性を生み出すに至った土壌の多様さに驚かざるをえない。

慌しい旅であったが、ピカソやダリ、更には、グレコ、ベラスケス、ゴヤ、といった巨匠達の絵とともに「人間」に、少しばかり会えたように思う。

再び、必ず行くと思う。

(一九八二・七・二四記)

(高等学校教諭)